

会話による美術鑑賞プログラムへの視座 英語によるプログラム「Let's Talk Art!」

大高 幸



土田麦穂《島の女》1912年 東京国立近代美術館蔵
屏風や掛け軸の鑑賞では視点の高さも変える（筆者撮影）

東京国立近代美術館が来館者の国際化に対応して英語による所蔵品展鑑賞プログラムを開始するため、二〇一七年度から三年間、プログラム設計・監修および二〇一八年三月に公募により選ばれた有償ファシリテーターの研修等の業務を担う貴重な機会を頂いた。新プログラム「Let's Talk Art!」は、二〇一九年三月二二日を皮切りに毎週金曜日の夕方実施している。今回はその趣旨と教授法のうちテーマ設定と事前統合について紹介したい【註1】。

「Let's Talk Art!」

一時間の本プログラムでは、上限六名の参加者が三作品について文字通り語り合う。会話による近代日本美術の探究過程で、参加者が日本美術・文化および参加者間異文化交流を楽しむことをねらいとする。美術鑑賞は会話による探究すなわち参加者の関心に基づく発見学習に適している。音楽や演劇と異なり、美術作品は物質として身近に存在し続け、探究過程で作品を知覚・含味し、何かを発見し続けることが可能だからだ。また、言語を超えた美術作品に対して鑑賞者が抱く感情や思いは、文化の垣根を越えて、言語を介して共有可能である。鑑賞者の作品に関する意見は、各人の個人的・社会的文脈の違いにより多様であり、会話は、他者、翻って自己への気づきを促す。

知覚し得ない作品の文脈情報、たとえば作家が技法を学んだ場所、発表当時の評価、居住空間における掛け軸の鑑賞法等は、ファシリテーターが参加者の関心や疑問に応じて語る。関心に基づく文脈情報提供は、美術鑑賞経験をより豊かにし、知覚により発見したと文脈情報に関連すること、ひいては発見力を鑑賞

者自身が認識する機会にもなる。また、鑑賞作品には重要文化財や日本画を含め、作品に関連する文化・観光情報も盛り込み、参加者の経験ともつなげている。

これまでの参加者は日本在住外国人が多く、その知人の海外在住者、観光客や、英語力を維持したい美術愛好家の日本人を含む。終了時のアンケート（任意）で全参加者が回答では、参加満足度は高く、「他者の異なる視点を知るのが面白かった」、「自分だけでは気づかないことを発見できて楽しかった」といった自由記述が繰り返され、初対面で意気投合して夕食に繰り出すグループもある。参加者がプログラムを堪能してきたことがうかがえる。

テーマ設定

鑑賞機会でのテーマ設定の良し悪しについては諸説あるが、日本美術・文化の知識が少ない人が気軽に楽しめることを主眼とする本プログラムではテーマを設定している。各ファシリテーターが研究に基づきテーマと作品を選定するため、毎回、異なるプログラムとなる。展示替えも頻繁にあり、繰り返し参加しても楽しめるよう心掛けている。

テーマ設定には三つの効果がある。第一に、テーマにより話題が浮かび上がり、話しやすくなる。学校と違い、美術館では見知らぬ人々が初めて出会う。ましてや文化が異なる場合、会話への心理的な障壁もあるだろう。「先生」のような権威不在で誰もが対等な関係を築き得る美術館のプログラムは、民主的な学習共同体の形成（一座建立）に最適だ。その第一歩は話しやすいグループの形成であり、テーマはそのきっかけになる。

第二に、近代日本美術を網羅することは一回では不可能であり、各回はそのエッセンスを味わうことをねらう。本プログラムのテーマは、作品鑑賞の足掛かりとなる大枠であり、同じ作品でもテーマによって別の特徴が立ち現れる。テーマには複数の層があり、たとえば「特別な瞬間」「風景」は、場面やモチーフ（絵画における中心的イメージ）等「描かれた何か」に関する普遍的なテーマで、入りやすい入り口といえる。「光」「色」は様式や技法に、「アイデンティティ」はモチーフや作家の思いに着目しやすく、「日本画の変遷」は、複数の作品を俯瞰するメタ（高次の）テーマである。いずれにせよ、会話による探究は

作品のモチーフ、様式、媒体、制作時期、発表当時の評価、作家の意図や功績、参加者の感想等に及び、近代日本美術の心髓の享受へと誘う。

第三に、テーマは終了後に参加者がプログラムでの経験を振り返ったり、他者と語ったりする一助にもなる。毎回、作品の特徴に適したテーマ設定と異文化の参加者に留意して、近代日本美術の本質と参加者の心に触れるべく、探究過程において作品間比較、参加者の文化間比較を取り入れている。

事前統合

プログラム開始以来、二種類の参加者が存在する。第一は、プログラムの趣旨を事前に理解し、会話への意欲がある人たち。第二は、従来の解説型ツアーと勘違いして、心の準備ができていない人たち。後者は前者より少ないが情報を未確認のまま参加した人々で、とりわけ直前に参加を決めた方に見受けられる。会話による美術鑑賞・異文化交流プログラムが世界でも新しいことから、これは想定していた。動機の異なる初対面の人々が会話する探究型鑑賞プログラムの要素として重要なのが事前統合である。

事前統合とは、たとえば、同じ小船に乗り込む人々が、安全で楽しい船旅となるよう、航路と船上での役割を船出前に各

自考える機会を提供することである。美術館での探究型鑑賞プログラムは国際的に一般的で、多数の専門書が出版されてきた。しかし、事前統合を論述するものは稀である。一因として、大半の美術館教育書が学校団体を対象として想定してきたことが考えられる。市民の異文化交流を目論む本プログラムでは、参加者が安心して意見を発言し他者の声を傾聴する相互尊敬の場を、全員が自ら築く必要がある。事前統合では、解説型プログラムと勘違いしている参加者も想定し、ファシリテーターは、これが会話による探究・意見交換を楽しむプログラムであり、美術作品に対して心に浮かぶ各人の考えはどれも重要で、美術に関しては「一つの正解」がある訳ではないことを話す。

さらに、事前統合の要は、各人が短い自己紹介をし合うだけでなく、ファシリテーターがテーマにちなむ質問をすることだろう。テーマおよびこれから鑑賞する作品と各人の過去の経験をつなぎ、考える機会を提供するためである。

たとえば、テーマが「人物画」の場合、「人物画と聞いて思い浮かぶものは何ですか」という質問はどうだろう。人は会話するとき、聞き手が理解できる話題を選ぶと自ずと努力する。初めて出会った異文化の人々の間では、知っていることを他者は知らないかもしれないということ

を念頭に置きながら会話が展開していく。この質問は、参加者にとって、共通の話題としては難しい可能性がある。ファシリテーターのOさんは、「あなたは、初対面の人がどんな人か、何を手掛りに想像しますか」という質問を採用し、表情、話し方、髪の色、装い、持ち物、ボディ・ランゲージを含む参加者の意見が飛び交った。事前統合が功を奏した場合、便乗により多様な意見が時を待たずして交わされる傾向にある。Oさんは「いま挙げてくださいように、表情や…を使って画家も人物を表現していますね。そのような手掛りをもとに人物画と一緒に探究していきますましよう」と結んだ。この事前統合は、鑑賞への好奇心をそそただけでなく、参加者（ファシリテーターを含む）が共同体を形づくった。このように、効果的な事前統合では、参加の過程、本プログラムでは、各人が考え、自由に意見交換を楽しむことが、短時間の体験により鑑賞前に了解される。美術探究の会話は過程が重要であり、各人が帰属文化・集団における先人観を再考するとともにグループが成長していく「註2」。事前統合の成否が鑑賞活動の成否を左右するといっても過言ではない。

おわりに

テーマ設定と事前統合は、多様な美術鑑

賞プログラムに適用し得る。ただし、ファシリテーター役のエデュケーターは、美術史や作品を熟知するだけでなく、会話による民主的形式の教育機会を提供できる教育者としての職能を要する。特に、事前統合の設計・実施は、専門家に求められる職能に基づくといえよう。[1] *Talk Art*」の開発・運営では、体系的研修、個別OJTによる専門家教育を実施してきた。ファシリテーター（フリーランス）は、美術に造詣の深い海外居住経験を有する常勤の大学英語講師等で、文化交流の重要性を認識し、切磋琢磨に余念がない。今後、外国語による美術館のプログラムの増加し、国際交流、文化の多様性の理解が一層進むことを願っている。

（放送大学客員准教授）

註

1 本プログラムの手法、構成等については、高幸「ワークショップ…その理念と人文科学系博物館における実践」天高幸・端山聡子編著『博物館教育論』放送大学教育振興会、二〇一六年、八一〜九八頁を参照されたい。

2 参加と過程を重視するボームは、個人もグループも変化するこのような過程を「対話」という。David Bohm, "Dialogue as a New Creative Order (1987)," in Lee Nichol (ed.), *The Essential David Bohm*, Routledge, London, 2003, pp.289-300を参照。